

2011/05/06

## 東京支部会員へのお礼

おかげさまで東京支部より震災被害者の方々に144750円の義援金を送ることができました。お約束通り、半分は日本赤十字を通して、残りの半分はあしなが育英会東日本大地震・津波遺児募金を通して今回の震災で教育を受ける機会を失った、未来の子供たちのサポートへとつなげます。これも、ひとえに支部の方々のご支援の賜物でございます。心よりお礼申し上げます。

先の4月28日の東京支部特別シンポジウム「技術者・研究者の視点から大規模災害を考える」には、わずか2週間強の周知期間にもかかわらず100名を超える参加者にご参加いただきました。シンポジウムでは、打ち切らざるを得ないほどの質問と、またパネルでは、パネリストの方々のみではなく会場から、若い方を含めて多くの建設的なご意見、疑問、問題提起をいただきました。その内容は、学会や大学の在り方、意見発信の方法、教育や日本のリスクに対する考えまで広範囲に広がりました。この内容は、岡田庶務幹事を中心として東京支部のWeb上に整理していきたいと思っております。実は、このシンポジウムの開催を検討する時には、計画停電と自粛ムード、交通機関の混乱の最中で、その中で開催することには多くの問題提起を受けました。直後の救援、復旧から復興というプロセスの中で、学会というコミュニティがその機能の一翼を担うべきという信念から、岡田庶務幹事の助けを得て、難しい内容になるにもかかわらず講演者とパネリストの先生方の勇気とお力添えをいただき開催することができました。今後は、東京支部だけではなく、学会の大きな力にしていけたらと思っています。

最後に、私の大学の最寄り駅である日吉駅では、3日に一度ぐらい、体育会の学生やサークルの学生有志が義援金を集めています。「すでにクレジットカードで募金を送った」というのは、その通りなのですが、私は義援金という意味と同時に、その活動をしようとしているメンバーを支援するという意味でわずかではありますが、募金をすることにしています。私たちは、何をしたら被災者の方の役に立てるかわかりません。学生たちは「なんか自分たちで役に立つことはないのか？」というジレンマの中で、大きい声を張り上げています。素晴らしいことだと思います。ある主任教授が大学院の学生に「君たちが今、本当に日本のためになる復興は、勉強することかもしれません」と挨拶をされました。それぞれの人がそれぞれの立場で考える深い挨拶だと思いました。一人ひとりが、日本のため、被災者のために努力と希望を見つけていきましょう。

取り急ぎ、お礼まで。

電子情報通信学会東京支部 支部長 山中直明